

地球第十三卷第五號

昭和五年五月一日

戰爭の地理學的考察（九）

小川 琢治

二六

第二號に述べた信玄の上毛西部の戰爭は東信佐久郡に於ける活動の繼續と見るべきもので、天文十四年五月二十三日の本曾小笠原聯合軍を鹽尻峠に破つて信州西部を威壓することに成功した翌十五年に村上氏の領分に侵入した戸石城攻めも亦たこの方面の第一著であつた。

此の年三月十五日信玄は上田の北方の山麓に在る戸石城を攻めた戰鬪の經過は略譜小解によれば僅かに四千餘人の小勢を以て村上氏の根據に近い處に在る敵城を攻めたもので、此の時には信玄は郡内を始めとし諏訪鹽尻伊那碓氷（笛吹）峠に押への爲めに兵を分つ必要があつた。

此の戸石城の位置は上田から地藏峠を越えて海津（松代）城に通ずる捷路の入口に當るから、村上氏も亦た直ちに援兵を出して之に後詰し、之に備へた甘利横田兩將は戰歿し、山本勘助が後備の諸角豊後の一隊を以つて村上勢の背面を衝いたので僅に全軍の敗北とならずに義清の軍を撃破した。但し獲た首級百九十三に對して戰死者七百二十一人を出したのであるから、近頃競戯に所謂辛勝に

過ぎぬ。是れは信玄連勝に氣驕つて村上氏の奮闘を豫期せなんだ油斷である。

同年十月六日笛吹(碓氷)峠合戦は上毛上杉方の攻勢に出た作戦に對する守勢の戦争であつた。信玄の東信南部を北進する運動は上毛西部の上杉氏屬城を脅威するものであるから、甲州の勢力の尙ほ佐久郡地方に固定せぬ間にその發展を阻止せんとする行動を起したのは當然の措置である。此の脅威は小笠原村上兩氏と共通である所から察すれば或は裏面に三者の氣脈聯絡を想はせるが、戸石城攻めの時に策應の形跡がないから、軍鑑にいふ如く戸石城攻めの失敗を好機として單獨の攻勢を執つたと考へてもよい。

此の戦争に参加した上杉勢は忍深谷上田箕田みだ新田館林膳山上白井厩橋沼田安中五甘長根白倉和田小幡松井田の諸城將にして、倉賀野六郎を大將分とし武藏上野の兵二萬餘人から成つた。箕輪城主にして上杉家の宿將たる長野信濃守業正のみは此の行動を結局甲州勢の上州侵入に口實を與へる愚策であると考へて参加せなだったので、名望力量の足らぬ倉賀野六郎が采配を執つたといふ。此の統帥其人を得ない多勢を恃む烏合の衆であつたことが作戰の計畫宜しさを缺くこととなり、又た戦場の駆け引にも影響する所少小でなかつたらしい。

軍鑑著者(高阪彈正と稱す)の評した如く此の大軍を二手に分けて一手は余路峠から信州に侵入するのは確かに一策で、甲州方は防禦に困つたであらうし、又た碓氷峠一方から働くならば輕井澤を焼き拂つて迅速に碓井峠に退き、甲州勢の坂を下る所を撃つべきであつた。

此の時信玄は病氣であつたから、板垣信形を大將として十月四日甲府を發せしめ、六日輕井澤に

到着し上州勢五千許の峠を下る處を迎へ撃つて之を破つた。信玄も亦た病を押して續いて出陣し、午後四千五百を率ひて輕井澤に着き、村上押への諸將も來り會し、上州勢の再び峠を越えて押し寄せたるに對し、新手で之と戦ひ、前後首級五千五百餘を獲たといふ。

天文十六年二月秋山馬場兩部將を伊奈に出して高遠方面の三砦を取り、四月信玄自ら諏訪に出て伊奈木曾口に働き、六月まで滯陣して西方の敵軍を威嚇しに後、八月二日甲府を發し、佐久郡志賀城を攻め落して内山に引き上げ、村上氏との間の最後の激戦が續いて上田原で行はれた。

上田原合戦は八月二十四日で、その位置は軍鑑によれば今の上田町の對岸上田原の平地であるといふ。が、地名辭書の説の如く、上田附近の平地であらう。此の時村上義清は七千人の寡兵なれども信玄と決戦せんと考へ、甲州の先鋒板垣信形は第一合に勝ちたるも返す敵軍に討たれ、飯富等奮闘して之を撃退したが、義清麾下の兵を以つて信玄の本隊を撃ち、馬場内藤等の横撃により終に撃退された。義清は此の一戦後越後に行き長尾景虎（上杉謙信）の許に身を寄せることゝなつた。

長尾景虎（上杉謙信）は村上氏の舊領恢復の復讐戦を試みんとして、十月九日八千の兵を率いて越後春日城を發し、地藏峠から上田附近即ち海野平に出で、信玄も亦た十月十二日甲府を發し一萬五千を以つて之に對し、決戦に至らずして交綏した。此の後河中島の豪族信玄に歸服し、東信地方（千曲川流域）は全く信玄の手に歸し、埴科郡善光寺平に進出した。

信玄の天文七年韮崎合戦から十六年上田原合戦に至る十年間の戦績は以上述べた如く、諏訪氏を滅し村上氏を逐ひ諏訪佐久小縣三郡を占領し、信濃の中の東に突出した部分が其の手に歸した。此

の經過を戰略地理上から追跡すれば、釜無川筋を作戦線として先づ諏訪湖盆を占領して、此の線を根據地帶として、若御子から北に向ひ千曲川上流に出で、小諸に達し、諏訪から大門和田兩峠を越えて海野平(上田附近)に進出し、小諸を支持點として碓氷(笛吹)峠を越えて上野西部碓氷郡に、その南の内山(野澤附近)から内山余地兩峠を越えて同じく甘樂郡に侵入し得ることゝなつた。又た海野平の占領により善光寺平に進出する前進根據地が出来た譯で、信州一圓を手中に收めんとする行動の序幕は此に至つて引かれた。

二七

信濃の西部は犀川天龍川木曾川の三溪谷より成り、前兩者には松本伊那の狹長なる兩平地が發達し、松本平には守護職小笠原氏の居城松本(深志)があり、伊那平には保科氏の高遠城があつて、狹隘なる木曾溪谷に據つた木曾氏と常に氣脈を通じて甲州の勢力に對抗しつゝあつた。而して之を掣馭する樞要の地點も亦た諏訪にして、信玄は此處から此の方面の攻略を試むることゝなつた。

天文十七年五月七日信玄は甲府を發し、諏訪から伊那方面に向ひ三砦を陥れて高遠城に逼つたのはその第二期作戰の着手であつた。然るに謙信が小縣郡に出兵したので、直ちに兵を收めて和田峠を越えて内山に陣して戸石の越後軍に向ひ、對陣十二日にして交綏した。信玄はこの小縣郡出兵の歸途七月朔日に笛吹峠を越えて松井田城に大物見を懸け城下に火を縱ち、上州勢を威嚇して三日引返し甲府に歸つた。

天文十八年四月十二日信玄は再び甲府を發して翌日諏訪に着き、伊那木曾松本の三方に兵を出し

て二十五日に小笠原長時と決戦せんとする時、謙信小縣郡に出たとの報を聞き、二十四日松本筋の兵を收めて二十五日小縣に向ひ、五月十日謙信兵を收めて去り、信玄は八月朔日甲府に歸つた。謙信の牽制により松本を攻めることは出来なうだが、此の間に保科氏降つて伊那平は終に信玄の手に歸した。

八月十八日信玄は甲府を發して笛吹峠を越えて上州に入り、三寺尾で内藤原馬場淺利小宮山の五部將は上州安中越前等と戦ひ勝ち、安中又は松井田を攻めんとする處へ、小笠原長時諏訪に攻めて來た報を得て、九月七日安中から引き取り諏訪に向ひ、小笠原氏は兵を收めた。

十九年三月十一日信玄甲府を發して再び松井田を攻めんとし、木曾小笠原の牽制に遇ひ引き返して諏訪から松本に向はんとし、更に謙信の地藏峠を越えて小縣に侵入した爲めに、五月朔日轉じて之に向つた。然れども此の時も亦た對陣十日にして謙信は兵を收めて越後に歸つた。此の時も亦謙信の往復した路は地藏峠を経たもので、その對陣した場處は上田附近であつたと想はれる。

信玄は同年九月十五日甲府を發し、本隊は小縣郡に出で、上田松本街道の保福寺峠を経て松本に向ひ、小山田板垣の支隊は鹽尻峠から桔梗原へ出る豫定であつた。之に對して小笠原長時は雛倉峠を越えて防戦し、二十三日保福寺で甲州軍は之を撃退して更に進んで松本城を攻めんとした。然るに板垣の策應せぬ爲めに計畫の齟齬を生じ、且つ謙信がまた海野平に出たので、引き返して、九月二十八日より十月十日まで對陣し、十一日謙信が先づ兵を收め、信玄も亦た此の牽制により松本城を攻めんとした目的を果さずして二十日に甲府に歸つた。

天文二十年は信玄の薨髮した年で、馬場甘利等屢々小笠原本會等の領分を襲つたが大きな合戦に至らず、二十一年三月謙信又た地藏峠を越えて小縣郡に入つて信玄と對陣し、その兵を收むる時に謙信の姉婿長尾政景三千を率いて殿戦し、之を追撃した甲軍との間に常田ときたで激戦が起り甲軍の先鋒小山田備中は戦死し、小山田左兵衛栗原左衛門は深手を負ひ後に死んだ。甘利馬場内藤の三人が之を撃退し、政景は終に敗れて退いた。甲越兩軍の火の出る様な激戦の第一回はこの合戦で、その戦場は上田小諸間の常田ときたであつた。

是によれば前に屢々對陣した海野平は淺間山の西に續いた烏帽子嶽の西南の裾野が千曲川に陵夷した波狀の平野を汎稱することが知れる。

同年八月信玄再び保福寺峠を越えて東筑摩郡に侵入し、奇襲により松本の北に在る荊谷原城を攻め落し、越えて二十二年五月下諏訪に出で、六日鹽尻峠を越えて松本に向ひ、小笠原長時の三千餘と桔梗原に戦ひ、甘利等五將之を撃破し、翌七日長時城を空うして四千五百にて出で、戦ひ、甘利左衛門再び突出して大捷を獲、十日深志（松本）城に殺到し、長時は終に城を明け渡して浪人となり、信州西北部も亦た信玄の手に歸した。蓋し此の時は謙信の聲援がなかつた爲めに全く潰滅したのである。

松本城の陷落により甲州兵の北進に當り、左翼の脅される危険が無くなつたので、此年八月河中島に於ける足溜りとして海津（松代）城が築かれて、小山田備中等が此の前線の警備に當ることゝなつた。松代は地藏峠の交通線の北の入口に在るから、此の築城後謙信は千曲川の中流海野平に侵入

することが出来難くなつて、二十三年六月その出兵は河中島で、此の時も亦た交綏して決戦を見えんだ。

同年八月信玄は木曾口に向ひ洗馬^{せば}を降し、翌弘治元年三月木曾に侵入し、四月鳥居峠を越えて蕨^{あざ}原^{はら}に陣し、此に砦^{とりで}を設けて栗原多田兩將を残して歸り、四月六日河中島に出た謙信と對陣し、復た交綏した。此年謙信は關東及び越中に出陣しつゝあつたので、八月二十一日信玄は再び鳥居峠を越えて蕨原に陣し、木曾氏の御嶽^{おんたけ}の出城及び福島の本城(今大通寺のある高地)を攻めて終に木曾氏を降した。

是に於いて信州に於ける信玄の四敵皆な亡びた譯で、今や信玄は殆んど信州全部を占領することゝなつて、その北境は上杉謙信の虎踞する爲め、更に進出し能はざるも、他の三面に向つては内線上の作戰を自由に試み得る地歩を占め得た。

弘治二年信玄は獲得した領分の整理に従事し、三月伊那郡に出馬して全く之を平げ、秋山伯耆守を高遠に置いて支配せしめ、飯富三郎兵衛は伊那衆を率いて之を助け、蓼遠兩州出兵の先鋒たらしめた。

又た河中島の方面には小山田備中を海津より雨飾城に移して、海津へは春日(改め高坂)彈正をして海津を守らせた。この雨飾の位置は明かならぬが、松代の東北の鳥打峠の脇であるとの説がある。兩城犄角の勢を成して河中島に來る謙信に當らんとしたものとするれば、鳥打峠の南に今の地圖に雨巖山といふのが或はそれで、山城であつたと想はれる。

二八

信玄が佐久郡を手中に収めた後に直ちに上州方面の攻略を手控へた理由は天文十八、九年の頃には未だ小笠原氏が松本平に據つてゐて、その牽制を受けたこと、十九年九月に北條家から上州への活動の停止を申込まれたのに在つた。然るに弘治三年に至り北條氏康は上杉憲政の越後に落ちて行つて謙信を頼み、關東諸豪族も亦たその聲援を恃んで北條氏に反抗するものが出た結果、武藏の太田三樂は氏康之を攻め、上州の長野信濃は信玄之を攻めることにしたいとの希望を甲州に提案した。此の時には信玄は既に殆んど信濃全國を占有したから、是れ實に渡りに船といふべきで、信玄はその協同作戰の希望に應じて上州出兵の行動を起した。

即ち弘治三年三月中旬信玄は余地峠から上州に進出し、箕輪の城主長野信濃を大將とした北武西毛の侍大將十人の約二萬の兵と、四月九日三日(ケ)尻原上で會戦した。之に當つた甲軍は甘利飯富馬場内藤等八將で、信玄の嗣子義信指麾の下に攻勢を取つて勝利を獲た。

三ヶ尻といふ地名は今深谷町の南に當つた荒川の北岸に在る。その位置から推せば信玄は余地峠から秩父を過ぎて武藏西北部に出で、北條氏の兵と聯絡を取る積であつたらうと想はれる。

信玄は此の勝勢に乗じて十二日箕輪城へ押し寄せんとしたが、謙信が河中島に出たとの報を得、上州を捨て、河中島に向ひ、五月末まで對陣し、八月再び箕輪へ出動したるも、城兵出て之に應ぜぬ爲めに十月中旬甲府に還つた。

永祿元年二月謙信より和議の提案があつたが、信玄は之を斥けた結果、五月から閏六月まで七十

餘日の河中島の對陣となり、翌二年二月また信玄は河中島に出馬して、越後に心を寄する諸士を彈壓し、三月謙信も亦た河中島に來り、十五日の對陣があつた。謙信の此の提案は越中に復讐戦を試むること、上杉憲政を原との如く上州平井城に戻さんとする希望に出たものであつたが、信玄は謙信の計畫に對して、その西方及び東南方への勢力の扶植策を飽くまで妨害せんとした。

六月中頃信玄の松本出馬は同じ意圖の一部にして、飯富、甘利、馬場の三將をして、飛驒侵入の行動を起さしめ、鹽屋江間兩將と戦ひ、七年に至り終に船戶城主江間常陸守を降して、飛驒半國を占領し、江間をして越中侵入の先鋒たらしめた。此の行動も亦た謙信の上洛の道筋を脅威妨害するもので、血性男兒不識庵をして一身を賭して信玄と決闘せんとせしめた一因であつたらうと想はれる。

永祿二年九月信玄は再び箕輪城を攻めたるも志を得ず、三年二月信玄は氏康より謙信の侵入に對する後援の要望に應じて笛吹峠まで出馬した。此の時謙信の威勢旺盛にして殆んど八州を席卷せんとし、甲州部將飯富兵部の如きは北條氏の滅亡疑なく、その未だ滅びざる間に謙信の背面を衝かねば、今川、武田も續いて滅亡すると考へ、碓氷峠から一旦甲州に退き、三増峠を越えて謙信と有無の一戦あるべしと勸めた位であつた。然るに信玄は嶺上に滯陣して、その間に箕輪安中松井田の三城を除いた西毛の諸豪を服したのみで、謙信の小田原攻めの失敗を袖手して傍觀した。

永祿四年二月謙信の上洛を報じたるに拘はらず、信玄は河中島に出馬して越後大田切まで侵入し六月には野尻附近の和利ヶ嶽城を陥れ、終に九月十日の河中島の決戦を見るに至つた。此の時謙信

が八月中旬に犀川千曲川の兩河を渡つて、松代の西に當り犀川に臨んだ妻女山に陣したのは信玄との決戦を目的とした背水の陣を布いたものであつた。信玄は同月十八日甲府を發し、二十四日河川島に着き海津城と妻女山との中間に在る雨の宮の渡船場を取り切つて二十九日海津城に入り、謙信の退路を遮斷しつゝその行動を窺つた。然るに謙信は泰然として動かぬので、九月九日の夜に至り甲州側から明早攻戦に出んと決し、高坂飯富小山田眞田小幡等の十隊は直ちに妻女山に向ひ、信玄の本隊は河を渡つて河中島に出て、謙信の勝敗に拘はらず越後に退く所を撃たんとした計畫であつた。戦機を察知するに敏活にして果敢なる謙信は此の目的を看破してその意表に出て、朝霧を利用して同じく河中島に出で、兵數二倍の敵軍の河の兩岸に別れたるに乗じて、直ちに本隊に突進し、麾下を以つて信玄の本陣を陥れ、自ら刀を揮ふて信玄に一撃を加へて宿怨を晴らした。此の時甲軍は全く不意打ちに狼狽したに拘らず、苦闘して越軍の猛襲を支へたので、高坂飯富等の挾撃を得て頽勢を挽回したが、信玄父子共に負傷し、信繁勘助等は戦歿し、信玄一代に於ける最大の損失を被つた。軍鑑によれば甲軍は首級三千百十七を獲たといひ、自軍の死傷數を擧げざるも、甘糟近江の殿軍千餘の犀川の東に留つて散卒を收集する間に追撃を試みなんだのから、甲軍の損害の多大にして兵氣の沮喪せる状態を推知するに足るのである。